

万葉集卷一増補部の編纂意図

北
島
徹

Summary

The editorial purpose of why the first volume of *Manyōsyū* was added

Kitajima Tōru

In the first volume of *Manyōsyū*, 50 poems comprising the first half of this volume were edited as an anthology. Later, poems written in the Fujiwara period were added to complete the volume. Many other poems written at this time were recorded in the third and ninth volumes. Comparing these three volumes, it is noteworthy that most of the poems added to the first volume are about the Fujiwara capital. In view of this, we can conjecture about why these poems were added. The new anthology was an offering to the Genmei Empress who transferred the capital to Heijo, and a means of reposing the soul of the Fujiwara capital.

万葉集卷一に吉野を詠んだ次のような歌がある。

大行天皇、吉野宮に幸す時の歌

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む

(卷一・七四)

右の一首、或は云ふ、天皇の御製歌^{注1}

この歌の作者について、題詞は「大行天皇」、左注は「天皇」と記しているが、ともに文武天皇を指すと考えられている。文武天皇の吉野行幸は『続日本紀』に二回見えており、一つは、大宝元(七〇一)年二月二〇、二七日、今一つは、大宝一(七〇二)年七月一日(還幸時不明)である。ここにあげた歌が、この二回のうちいずれの時のものであるかは不明であるが、風の寒さを詠んでいることを見ると、前者の折のものであると考えてよいであろう。

さて、この歌が大宝元年二月の吉野行幸時に、文武天皇が詠んだものだとして歌を見ると、どうも天皇自らの作として相応しくないものを感じるのである。^{注2}いや、疑問に思うのはこの歌だけではない。同じ時に詠まれた別のもう一首、次の歌も腑に落ちないのである。

宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに

(卷一・七五)

右の一首、長屋王

文武天皇は、行幸地吉野にあって吉野を讚美することなく、都に残してきた妻のことを胸に秘めて旅の寂しさを歌っている。長屋王も吉野を詠まず、都から言えば吉野の手前の宇治間山をとり上げ、衣を貸してくれぬ妹もいないのに、とこれまた旅の寂しさを詠んでいる。吉野が持統天

皇にとつて「タマフリの聖地」であり、吉野行幸の目的が天皇のタマフリにあったことは、大浜巖比古氏によって既に述べられているところである。^{注3}その持統天皇のすぐ後を継いだ文武天皇が、まったく違う意味で吉野を捉えていたとは考えがたい。この大宝元年の吉野行幸も、持統朝と同じ意味合いで行われたと考えてよいであろう。しかるに長屋王はもとより、文武天皇までが吉野を讚美する歌を残していないというのは、いったいどうしてなのか。これが私の素朴な疑問であり、本稿の出発点である。

この二首について、伊藤博氏が『万葉集全注 卷第一』で、次のように述べておられる。

二首とも旅先の景である「風」を通しての望郷歌である。ただし、七四の「夜」の風に対し、七五では「朝」の風を持ち出している。

この関係は、七四の「み吉野」「み」を冠して言う以上、目的地の「吉野」を指している)に対して、み吉野に至る中途の山「宇治間山」を持ち出したことと、深くかかわる。「朝」から「夜」への時間の移ろいは、「中途」から「目的地」への空間の推移に対応している。前の歌に、夜と目的地とが示されたので、後の歌では逆転して朝と中途の地とを示して望郷の心を述べたのであり、この妙味ある「和」の中に歌心が認められるわけで、首尾つながり合って、終始つきぬこの旅での望郷の念がひたすらに示されることになった。

このように見てくると、「我がひとり寝む」に裏づけられている「妻」に対しては、「衣貸すべき妹」が旅先の「女」の意で布置されたことがますます明瞭になってくる。人に関しても、旅における時

間と空間の深まりに従って「女」から「妻」に絞られていくと読みとられるようになってくるのも風雅の心というものである。^{註4}

氏の言われるように確かにこの二首は、「首尾つながり合って、終始つきぬこの旅での望郷の念がひたすらに示され」ている。しかし私は、望郷の念だけしか示されていないことに、行幸時の作として相応しくないものを感じるのである。

吉野に行こうとして行われたはずの行幸にあって、天皇自ら吉野を讃えることをやめ、望郷の歌だけしか残していないこと。行幸時の作として載せられている二首が、二首とも目的的地である吉野を歌っていないこと。この二点を見ても、私にはこの二首が、特異な存在のように見えるのであるが、次に、別の面においてもこれらの二首が特異な歌であると思われることについて述べることにする。

二

吉野は、前述したように万葉びとにとって特別の地、「見ることのタマフリ」の聖地であった。その吉野にあって万葉びとはいかに歌を詠んだのか、それをざっと眺めてみたい。

『万葉集』に載せられた吉野関係の歌は、私の数えたところでは、長歌一七首（うち或本歌一首）、短歌七六首（うち或本歌六首）の、計九三首である。^{註5}これを今全部あげるには紙数も足らないので、歌に詠み込まれた素材に着目して分類し、一覧表にして見ることにする。

表1を見ると、まず目につくのが、川の詠み込まれた歌の多さである。

表1

素材	川		山	山と川	野	山と野	その他							
巻、歌番号	①	37	⑦	1103	①	25*	①	36*	④	693	⑥	926*	①	27
		39		1104		26*		38*	⑦	1345		927	②	111
	②	119		1105		52*		242		1368				112
		130		1132		70		315*		1405				113
	③	313		1134		74		907*		1406			⑦	1133
		316		1173		75		909	⑩	1919			⑩	2292
		332	⑨	1714	③	243		923*	⑫	3065			⑪	2837
		335		1720		244		1005*		3179			⑬	3230*
		375		1721		353		1006					⑭	4099
		430		1722		429		1131	⑦				⑮	4224
	⑥	908		1723	⑥	914		1736	⑨					
		910		1724		924		4098*	⑱					
		911		1725	⑦	1120								
		912		1737		1130								
		913*	⑩	1868	⑨	1713								
		915		2161	⑩	1831								
		916	⑬	3232*		1944								
		920*		3233	⑬	3291*								
		921	⑱	4100		3293*								
		922				3294								
	925													
	960													

*歌番号右肩に付した・印は長歌であることを表す。

一首の中に山とともに川が詠み込まれたものをも入れると、全部で五三首になり、全体の半数を軽く超えてしまう。離宮のあった場所とも関係しているであろうが、万葉びとの目は、まず吉野の川に集中していたことがわかる。「見れど飽かぬ」と何度も歌われるほど吉野の川は美しかっ

たのであろう。次に多いのが山で、全部で一八首を数える。今問題にしている七四、また七五の歌はこの中に入っているが、この山を詠んだものを子細に見てゆくと、意外にも山そのものを直接に歌ったもの、山だけを単独に歌ったものが少ないことに気がつく。以下、山の詠み込まれた歌を並べて見ることにする。

① み吉野の耳我の嶺に 時なくそ雪は降りける 間なくそ雨は降りける その雪の時なきがごと その雨の間なきがごとく 隈もおちず思ひつつぞ来し その山道を (巻一・二二五)

② み吉野の耳我の山に 時じくそ雪は降るといふ 間なくそ雨は降るといふ その雪の時じきがごと その雨の間なきがごとく 隈もおちず思ひつつぞ来し その山道を (或本歌 巻一・二二六)

③ やすみししわご大君 高照らす日の皇子 あらたへの藤井が原に大御門始めたまひて 埴安の堤の上に あり立たし見したまへば 大和の青香具山は 日の経の大き御門に 春山としみさび立てり 畝傍のこの瑞山は 日の緯の大き御門に 瑞山と山さびいます 耳梨の青菅山は 背面の大き御門に よろしなへ神さび立てり 名ぐはしき吉野の山は 影友の大き御門ゆ 雲居にそ遠くありける 高知るや天の御陰 天知るや日の御陰の 水こそば常にあらめ 御井の清水 (巻一・五二)

④ 大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びそ越ゆなる (巻一・七〇)

⑤ み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む (巻一・七四)

⑥ 宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに (巻一・七五)

⑦ 大君は千歳にまさむ白雲も三船の山に絶ゆる日あらめや (巻三・二四三)

⑧ み吉野の三船の山に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに (巻三・二四四)

⑨ み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびけり見ゆ (巻三・三三三)

⑩ 山のまゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく (巻三・四二九)

⑪ み吉野の象山のまの木末にはここだも騒く鳥の声かも (巻六・九二四)

⑫ み吉野の青根が峰の蘿席誰か織りけむ経緯なしに (巻七・一一二〇)

⑬ 神さぶる岩根ごしきみ吉野の水分山を見れば悲しも (巻七・一一三〇)

⑭ 朝霧にしのに濡れて呼子鳥三船の山ゆ鳴き渡る見ゆ (巻一〇・一八三二)

⑮ 藤波の散らまく惜しみほととぎす今城の岡を鳴きて越ゆなり (巻一〇・一九四四)

⑯ み吉野の真木立つ山に 青く生ふる山菅の根の ねもころに我が思ふきみは…… (巻一三・三三九一)

⑩ み吉野の御金の岳に 間なくぞ雨は降るといふ 時じくそ雪は降るといふ その雨の間なきがごとく その雪の時じきがごと 間も落ちず我はそ恋ふる 妹がただかに
(卷一三・三二九三)

⑪ み雪降る吉野の岳に居る雲のよそに見し兒に恋ひ渡るかも
(卷一三・三二九四)

以上のうち、山を序詞等、比喩に用いている七首(①②⑦⑧⑬⑭⑯)は、山そのものを歌うことに主眼があったとは言えない。また⑨の歌も、藤原宮の御井に主眼があって、吉野の山は大和三山とともに藤原宮を囲む四方の山の一つに数えられているに過ぎない。吉野にあって山を詠んだというものではないのである。

さらに⑩は、同じ作者によるすぐ後の四三〇番の歌が川を呼んだものであって、二首の組み合わせによって山と川とが詠まれていることになる。山だけを歌ったものとは言えないのである。同様に⑪も、直前の長歌で山と川とが、直後の九二五番の歌で川が詠まれている。したがってこれらも、作者が山だけに注目していたのではないと言えよう。

また⑬は、吉野の歌が五首集められた中の一首であるが、その五首のうち三首までが川を詠み込んでいて、吉野の歌として全体で山と川とを詠み込んだ形をとっている。この⑬の場合、載せられている巻が類聚歌巻であることを考えると、⑬を含む五首の作者は別人である可能性があるし、作歌の時も異なるかもしれない。したがって⑬は、単独で山だけを歌ったものと見ることもできる。しかし逆に⑬の作歌時には川の歌もあって、それが類聚された際に別のところに入れられた可能性もないわけではない。同様に類聚歌巻である巻七及び巻一〇に収められた⑫⑭⑮

なども、作歌時点では他に川の歌もあった可能性が考えられる。したがってこれらも、山だけを詠み込んだ確実な作とは見ない方がよいであろう。

以上のように、山を詠んだ歌の中から、作者が川にも目を向けていたと思われるもの、作者は別でも川を詠んだ歌と組み合わせで残された可能性のあるものを除外してゆくと、残るのは④⑤⑥⑨の四首だけということになる(もちろんこれら四首も、作歌時点では川の歌がともに詠まっていたのだと見ることも可能である。ただ万葉集に載せられている形で見ると、純粋に山のみを詠んだものとして残されているということである)。

このように見てくると、吉野がいかに川と密接に結びついた土地であったかが知られる。同時に、川に一切目を向けていないこれら四首が、吉野の歌としては特異な存在であることもわかるのである。

さてこれで、問題の七四、七五の二首が、先に述べた二点、
一 行幸地にありながら吉野を詠んでいないこと。

二 行幸時の作でありながら二首とも吉野から心が離れていること。

という特異性の上に、さらに

三 吉野での作でありながら川をまったく無視していること。

という特異性が見出せるのである。やはりこの二首は、問題の多い歌だと言わざるを得ないのである。

ところで、ここに至って注目すべきことが見出せる。それは、今特異な存在として浮かび上がった四首のうち、三首までが巻一に収められている、ということである。しかもその三首は、巻一でも後半部、すなわ

ち巻一の増補部と言われる部分（これについては後述）に入っているのである。このことに注目してみると、当面の二首の特異性は、二首だけの問題ではなくなってくる。七〇番の歌をも含めた三首が、どうして増補部に入っているのか、ということが問題になってくる。すなわち、編者の編集態度とかかわってくるということである。そこで目を転じて、巻一増補部について考えた上で、今の問題に帰ることにしたい。

なお、巻一増補部については、既に伊藤博氏に詳しい論がある。^{注一}また私も以前に考えをまとめたことがある。^{注二}拙稿は、伊藤氏の論と若干違った部分もあるのだが、飛鳥から藤原に遷都された時の歌を境にして、巻一が二つに分かれると考える点では同じである。一応次項では、私の捉えた巻一増補部をとり上げて考察を進めることにする。

三

巻一の増補部は、前述したように藤原時代の歌を載せた部分と言う。具体的には、五二番の歌から七八番の歌（或本歌を除く）までの二六首が、最初に増補されたと考えているので、その部分について検討した上で、この部分を増補した編者の意図を探ってみたい。以下、しばらくこの部分を単に「増補部」と称することにする。

増補部を五二〜七八番までとすると、年代的には藤原京に遷都された持統八（六九四）年二月から、平城京に遷都される和銅三（七一一）年三月までの一八年間ということになる。この間に作られた歌が載せられているのであるが、言い換えれば、一八年間に作られた多くの歌の中

から二六首が選ばれて増補されたということになる。そのように考えると、増補を行った人物がどういう意図でこれら二六首を選んだのかということが問題になってくる。この意図を考えるためには、増補部の歌がどのようなものであるのか、一つ一つにあたってみる必要があることはもちろんであるが、別に、増補を行った編纂時に切り捨てられた歌がどのようなものであったのか、それらと比較することも効果的な方法であると言えよう。

では増補時に切り捨てられた歌はどこにあり、いったいどのような歌であるのか。今となつてはその全貌を知ることが不可能であるとか言いようがない。しかし、増補部と年代的に一致する歌を他の巻から拾い集めてくることは、ある程度可能である。持統八年一二月以降、和銅三年三月までの間に詠まれたと思われる歌を、今『^{注三}伊藤万葉集要覧』所収の「年表編」によって拾うと、次頁の表2のようになる（ただし巻一に合せて、雑歌に限った）。

この表を見ると、ほとんどの歌が作歌年次を明記していないものであることがわかる。したがって作歌時の推定には諸説あって、必ずしもこの表が正しいというものではないだろう。しかしこの表を見るに、増補部の年代と重なる歌が、巻三と巻九とに集中していることは注目してよからう。これほどまでにまとまった形で、増補部と年次を同じくする歌が残っているということは、増補時に切り捨てられた資料が、巻三・巻九の編纂時に用いられたと考えることもできるのではないだろうか。

巻三・九と巻一との関係については、伊藤博氏が言われるように、^{注四}巻三が「巻一・二の拾遺歌巻」であり、巻九が「遠く巻一・二を仰ぎなが

表2

西暦	天皇	年号	万葉集
六九四	持統	八	〈この年以後〉長屋王、故郷の歌(3・二六八)
六九七	文武	一	〈この年以前〉天皇雷丘に出遊の時、人麻呂の歌(3・三三五)、天皇・志斐嬪贈答歌(3・三三六・三三七) 〈年次未詳〉高市黒人、近江旧都の歌(3・三〇五)
六九九		三	長意吉麻呂の応詔歌(3・二三八) 〈この年以前〉弓削皇子、吉野出遊の時の歌(3・二四二)、春日王の和歌(3・二四三)、或本歌(3・二四四人麻呂歌集)、弓削皇子の歌(8・一四六七・一六〇八)、弓削皇子に献る歌(9・一七〇一)一七〇三・一七〇九)
七〇一		大宝元	十月持統太上天皇・文武大行天皇、紀伊国行幸の時(9・一六六七)一六七二・一六七四一六七八)、長意吉麻呂の歌(9・一六七三)、坂上人長の歌(9・一六七九)、後人の歌(9・一六八〇・一六八一) 〈この年以前〉弁基の歌(3・二九八) 〈この年以後〉春日老の歌(3・二八二・二八四・二八六、9・一七一七・一七一九)
七〇二		大宝二	〈このころか〉高市黒人の羈旅の歌(3・二七〇)一七七七)、高市黒人の歌(3・二七九・二八〇・二八三)、黒人の妻の答うる歌(3・二八一)、吉野離宮行幸の時の歌(9・一七三三・一七三四)、高市の歌(9・一七一八)、小弁の歌(9・一七三四)
七〇五		慶雲二	〈このころか〉長田王、筑紫に遣わされた時、石川大夫との贈答歌(3・二四五)一四八) 〈この年以前〉忍壁皇子に献る歌(9・一六八一)
七〇八	元明	和銅元	田口益人、上野国司に赴任の時、駿河浄見崎の歌(3・二九六・二九七)
七一〇		和銅三	〈この年以後〉鴨足人の香具山の歌(3・二五七)二五九)、或本歌(3・二六〇)

ら直接には巻三・四の拾遺歌巻として編まれた」とものと考えてよいであろう。今問題にしている持統八年二月から和銅三年三月までに作られた多くの雑歌に限って言うと、その中から最初に巻一増補時に二六首(以下この部分をA部と称する)が取られ、残った中から巻三のある部分(以下この部分をB部と称する)が作られ、最後に残ったものの中から何首か(以下この部分をC部と称する)が巻九に収められたということになる。

そこでA・B・C各部を比較し、そこに何らかの差異が認められたならば、増補時の編纂意図も明らかにされるであろう。
比較を行う前に、B部とC部とをもう少し詳しく限定しておく必要がある。上の表2には、巻三の場合二三五〜二九八番の歌までが入っている。巻三がおおむね年代順に並べられていることを考えると、表2に入っていないけれども、この範囲内の歌は、一応同年代のものとしてB部に入れてよいであろう。同様に、巻九の場合は一六六七〜一七三四番の歌までをC部と考えることにする。

さて、このように範囲を特定した上で各部を比較してみると、まず歌の内容によって一つの特徴をあげることができる。それは旅の歌の多さである。A部には行幸時の作が最も多く一九首を数えるが、六二番(入唐時の作)や六三番(唐での作)、七八番(藤原京から平城京に移る道中の作)なども旅の歌に入れると、二二首となる。A部全体二六首中二二首というのは、かなりの多さである。またB部における旅の歌は、全六四首中五〇首を数える。さらにC部では、全六八首中五八首となっている。旅の歌の多さという点では、各部門での差は見られないと言えよ

う。ところが一口に旅の歌と言っても、子細に見てゆくと、A部にはB・C部に見られない特徴があると言えるようである。

その特徴を見るために、今言うA部のうち、旅の歌を題詞とともに、以下にあげることにする。

大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇、紀伊国に幸す時の歌

54 巨勢山のつらつら樁つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を

55 あさもよし紀人ともしも真土山行き来と見らむ紀人ともしも

二年壬寅、太上天皇、参河国に幸す時の歌

57 引馬野ににはふ榛原入り乱れ衣にははせ旅のしるしに

58 いづくにか舟泊てすらむ安礼の崎漕ぎたみ行きし棚なし小舟

59 流らふるつま吹く風の寒き夜に我が背の君はひとりか寝らむ

60 夕に逢ひて朝面なみ名張にか日長き妹が廬せりけむ

61 ますらをのさつ矢たばさみ立ち向かひ射る形的形は見るにさやけし

三野連の入唐の時に、春日蔵首老の作る歌

62 ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向けてはや帰り来ね

山上臣憶良、大唐に在る時に、本郷を憶ひて作る歌

63 いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ

慶雲三年丙午、難波宮に幸す時に志貴皇子の作らず歌

64 葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ

65 霰打つ安良礼松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも

太上天皇、難波宮に幸す時の歌

66 大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆ

67 旅にして物恋之鳴毛聞こえざりせば恋ひて死なまし

68 大伴の三津の浜なる忘れ貝家なる妹を忘れて思へや

太上天皇、吉野宮に幸す時に、高市連黒人の作る歌

70 大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びそ越ゆるなる

大行天皇、難波宮に幸す時の歌

71 大和恋ひ眼の寝らえぬに心なくこの州輪回に鶴鳴くべしや

72 玉藻刈る沖辺は漕がじしきたへの枕のあたり忘れかねつも

73 我妹子を早み浜風大和なる我松椿吹かざるなゆめ

大行天皇、吉野宮に幸す時の歌

74 み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む

75 宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷る時に、御輿を

長屋の原に停めて、古郷を廻望みて作らず歌

78 飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ

以上を眺めると、旅の歌でありながら、旅先の景を詠み込み、素直にその地を讚美する歌が意外なほど少ないことに気がつく。これらの中では、大宝二年の参河国行幸時の五七・五八・六一番の歌と、慶雲三年の難波宮行幸時の六五番の歌、それに大行天皇難波行幸時の七二番の歌ぐらいのものなのである。他は、目的地そのものを詠んだものではない。常に心が家や故郷、都に向かっているものばかりなのである。言い換えると、旅先に心が無いと言えるだろう。

こういった特徴は、五四・五五番の二首を見ることで、一層はっきりとしてくる。これらは紀伊国行幸時の作であるが、二首とも目的地を詠んではいない。巨勢山は大和国内であるし、真土山は大和と紀伊との境

にあって、厳密には行幸先の紀伊国とは言えないのである。行幸時の作としては、それこそ巻九に載る同じ時の紀伊国行幸時の作の、白崎（一六六八）、三名部（一六六九）、湯羅（一六七〇・一六七二）、黒牛瀨（一六七二）、出立（一六七四）、藤白（一六七五）などを詠んだ歌の方が相応しいはずである。それが、巨勢山や真土山を詠んでいるのであるから、心は旅先に向かっていないとしか、言いようがないだろう。

以上のように、A部に載る旅の歌は、そのほとんどが旅先に心のない歌なのである。この特徴をA部全体とのかかわりにおいて考えると、旅の歌は、心が広くは大和、狭くは藤原の地に向かってしていると捉えることができる。

A部は、前述のとおり、その全体が藤原に都が置かれていた時代に詠まれた歌で占められている。そしてその構成を見ると、冒頭部と末尾部とに藤原宮関係歌が置かれていて、その間に旅の歌がすっぽり包まれた形になっている。その旅の歌の多くが、家や都に心を置いたものであったわけであるから、A部は、全体的に藤原の地に心が置かれていると見ることができるのである。

四

次に歌の内容から離れて、A・B・C各部に登場する人物に注目してみよう。すると、やはりある特徴が浮かび上がってくるのである。まずA部とB部とに出てくる作者を比較して見ることにする。

A部の作者（作者名は歌の配列順にあげた。以下同じである）

坂門人足、調首淡海、長意吉麻呂、高市黒人、誉謝女王、長皇子、舎人娘子、春日老、山上憶良、志貴皇子、置始東人、高安大島、身人部王、清江娘子、忍坂部乙麻呂、藤原宇合、文武天皇、長屋王、元明天皇、御名部皇女。

B部の作者

柿本人麻呂、持統天皇、志斐姫、長意吉麻呂、弓削皇子、春日王、長田王、石川大夫、鴨足人、刑部垂麻呂、志貴皇子、長屋王、阿倍女郎、高市黒人、石川少郎、黒人妻、春日老、丹比笠麻呂、石上卿、穂積老、間人大浦、小田事、角麻呂、田口益人。

A・B部ともに出てくる人物があるのは当然のことであろうが、ここで問題にしたいのは、当然入っていてよいはずの人物が、A部に姿を見せないことである。その人物とは、柿本人麻呂である。A部で人麻呂作歌が一首も見られないのに対し、B部では五歌群、一三首の多きを数えることができる。これは不自然なことと言えないであろうか。

このことは、さらにC部を見ても言える。

C部の作者（括弧内は或三）

（長意吉麻呂、坂上人長、間人宿祢、舎人皇子、（柿本人麻呂）、槐本、山上憶良、（川島皇子）、春日、高市黒人、春日老、（小弁）、元仁、島足、麻呂、丹比真人、石川卿、藤原宇合、基師

（人麻呂歌集歌 一六六七～一七〇九、一七二〇～一七二五）

C部には「或三」として人麻呂作が二首見えるほかに、はっきりと人麻呂作と記すものは見られない。しかしC部のほとんどが柿本人麻呂歌集によって編まれていることは見逃せない。作者としての人麻呂は見ら

れなくても、巻九には確実に人麻呂が存在しているのである。

A部に人麻呂作歌が見られないことに關して、A部の時代に人麻呂が中央には居なかったため、と考える見方もあろう。しかしそうだとすると、巻三の人麻呂作歌の存在が問題となってくる。卷三冒頭の二三五番の人麻呂歌は藤原遷都前の作である可能性があるので、A部の時代からはずれるかも知れない。しかし、二三九〜二四〇番の歌は文武三年二月から七月の間の作、二四九〜二五六番の歌は慶雲三年夏以降同年秋までの作、二六一〜二六二番の歌は平城遷都前の遷都に近い頃の作と、それぞれ西宮一民氏が『万葉集全注 卷第三』で推定されている通りだとすると、A部の年代に合致するのである。これらの歌のうちいずれかは、A部に入ってもおかしくないはずである。ところがA部には一首も人麻呂作歌が見られないのである。このように、A・B・C各部を眺める時、A部では徹底して人麻呂を排除しているようにも見受けられるのである。

A部、巻一増補部には、以上のように内容的には藤原の地に執着する心が見られ、人物的には人麻呂の姿が見られないという、二つの特徴があることを見てきた。このことにいったいどのような意味があるのか、次項で考察を進めてゆくことにする。

五

私は前掲拙稿において、巻一の増補を行った人物は、前半部のうち「藤原宮御宇天皇代」なる標題をもつ二八番の歌以降と、新しく増補した

部分とを合わせた、合計五〇首からなる「藤原宮歌群」を作ろうとしたのではなかったかと論じた。そこではこの「藤原宮歌群」を作る意図について一切触れなかった。今A部の内容を見てきた結果、藤原の地に執着するという特徴が見られたことで、何ゆえこのような特徴をもたせたのかという、増補部編者の意図を私なりに明らかにする必要があるだろう。

ところでこの「藤原宮歌群」はいつ出来上がったのかというと、A部の最後が、和銅三年平城遷都の時の歌で終わっていることと、増補の後に追補された歌が和銅五年四月の歌（八一〜八三）であることとを見るに、その間のことと考えることができる。これは増補部において持統天皇を「太上天皇」、文武天皇を「大行天皇」、元明天皇を「天皇」と記し、元明朝にあつての書き方であることと矛盾しない。したがって「藤原宮歌群」は、平城遷都後、間もない時期に作られたと考えてよいだろう。とすると、こういう時に「藤原宮歌群」を形成しようとした編者の意図とは、いったいどういうものであったのだろうか。この時に注目して考えてみたい。

遷都の時、ということでは万葉を眺めてみると、必ず歌が詠まれていることに気がつく。そしてその時の歌は、新都を讃えること以上に、旧都を哀しむことに重きが置かれているのであった。近江遷都の時に額田王が三輪山に執着する歌を詠み（巻一・一七〜一八）、また藤原遷都の時に志貴皇子が明日香を哀れむような歌を作っている（巻一・五一）。この五

一番の歌について、伊藤博氏は次のように述べておられる。
旧都をいかに悲しんでも、それは新都に遷った天皇の措置を批判す

ることにはならなかった。むしろ逆に、悲しめば悲しむほど宮廷人一同の心を代表し、共感を呼ぶことになったと思う。そしてそのことを反映して、歌はそこに置かれるべき時期に詠まれたのであった。志貴皇子の心底にも、別れを惜しむことが、残す土地の慰撫に、そして行く先の魂振りにつながるという伝統の思考がなかったと言いきれぬ。^{注12}

旧都を悲しむということは、言い換えれば旧都に心を置くことである。執着することである。今「藤原宮歌群」が、卷一後半部（増補部）において藤原の地に執着する心で満ちているのを見る時、「藤原宮歌群」の形成には、旧都に心を向けて作歌することと同じ意味があったのではないかと思えてくる。新都において新しい政務に就こうとする元明天皇に、この「藤原宮歌群」が捧げられることは、天皇にとっての魂振りともなる意味があったのではなかっただろうか。

六

さて、次に人麻呂の存在について考えなければならぬだろう。卷一前半部には、人麻呂作歌が長歌四首、短歌一首の、計一五首が載せられている。前半部全体で五〇首（或本歌を除く）という数であること、人麻呂に次いで歌数の多いのが額田王の五首であることを考え合わせると、この一五首というのは極めて数が多いといえる。このことは、卷一前半部の編纂問題とかかわると思われる。

卷一前半部の編者については、坂本信幸氏が「万葉集卷一卷頭歌群の

照応」において、人麻呂が想定されると述べておられる。^{注13}今、卷一前半部における人麻呂の歌の多さをあげたが、それらの人麻呂作歌がすべて「藤原御宇天皇代」に収められていることも考え合わせると、卷一前半部の編者として、人麻呂を考えることも妥当性のあることと言えるだろう。伊藤博氏は、この卷一前半部（ただし氏は五三番までと見ておられる）を「持統万葉」と呼ばれているが、^{注14}持統天皇に捧げられるようなものであったとすると、天皇との関係上、その編者として人麻呂が最も相応しいと言えよう。先に述べたのと同様、この「持統万葉」は藤原遷都後間もない頃に編まれたものではなかっただろうか。

ところでA部には人麻呂の作歌が見られなかった。今、卷一前半部が人麻呂によって編まれたものだとすると、増補を行った人物は、単に人麻呂の歌を排除したというのではなく、編者としての人麻呂をも排除したのではなかったかと思えてくる。

A部には、卷三に見られる人麻呂作歌が採られていなかった。もしも増補を行った人物が人麻呂作歌だけを排除したのであるなら、卷九に載るC部の他の作者の歌を載せてもよかったはずである。ところがそれらも載せていないところを見ると、C部の歌が、人麻呂の編んだ人麻呂歌集歌であったが故のことと考えてよいのではないだろうか。

ともあれ、このように見てくると、増補を行った人物は、かなり人麻呂を意識していたと見ることができよう。A部は「藤原宮歌群」を形成するために増補されたが、その目的は藤原の地への執着、哀惜にあった。しかし増補するにあたっては、前半部の編者としての人麻呂を意識していたのではないであろうか。それはある種の対抗意識と言ってよいかも

しれない。その対抗意識が、A部に人麻呂の姿を排除する方向に向かわせたものと考えるのである。

さてここに至って、A部の吉野の歌に戻ることができそうである。文武天皇御製、長屋王の歌、黒人の作のすべてが吉野に心を置くことなく、また吉野川を歌うものでもなかった。それは一つには藤原への執着を強調するために選ばれたためのことと考えられる。しかしもう一点別に考えると、吉野川の歌を載せなかったのは、巻一前半部にある吉野讚歌(二六〇—二六九)において、人麻呂が吉野川を見事に歌いあげたことへの、一つの抵抗であったのではないだろうか。

以上推論の上に推論を重ねるようなことになったが、巻一後半に載る旅の歌が、旅の歌らしくない点に疑問をもち、それを解く形で巻一後半部編纂の意図を考えてみた。ここで当然その編者が誰であるのかということに言及すべきなのであるが、今その人物を特定できる材料のないのが残念である。この問題は、いづれ巻一を離れ、まったく別の観点から考え直してみたいと思っている。

注

- 1 本稿執筆にあたって使用したテキストは、塙書房刊『万葉集 訳文篇』である。以下歌の引用は、すべてこれによる。
- 2 七四番の歌が文武御製として相応しくないという疑問は、はやく賀茂真淵が述べているところである。『万葉考』には「難波吉野などへの幸は、御心ずさみの為なる事、上の哥にも見ゆ、然るにいかで此哥の如くなげき給ふ事有んや」とあり、この歌を御製とは見ず、從駕の人の作と考えている。山田孝雄『万葉集講義』も同様に説いている。本稿ではこの歌を文武御製と見た上で、この歌の御製歌らしからぬ点について考える。

- 3 大濱巖比古「持統天皇はなぜ吉野へ行ったか」(『新万葉考』所収) 参照。
- 4 伊藤博『万葉集全注 巻第一』二七四頁、「一つの歌の關係」参照。
- 5 ここにあげた歌数は、吉野で作られたもの以外に、吉野の地名を詠み込んでいるものも含めての数である。
- 6 吉野と川との結びつきに関しては、なお野を詠んだ歌や、その他のものを詠んだ歌などについて詳しく検討した上で考える必要がある。しかし、今問題にしている七四、七五の二首が山を詠んだものである関係上、また紙数の都合上、ここでは他の歌について言及しないことにした。他に問題のあるものもあり、それについて考えていることもあるが、別の機会に譲ることにする。
- 7 伊藤博『万葉集の構造と成立 上』第二章「舒明以前の万葉歌の性格」、同書下、第九章「女帝と歌集」参照。
- 8 拙稿「万葉集巻一後半部の編纂——『藤原宮歌群』の形成——」(『古典と民俗』第一六号) 参照。
- 9 桜井満編修『必携万葉集要覧』桜楓社、昭和五五年版による。
- 10 伊藤博、前出6同書上、第二章第三節「卷三以下の『近つ世』の歌」参照。
- 11 西宮一民『万葉集全注 卷第三』には、二二九—二四〇の歌の作歌時期について直接述べられていない。ただ直前の二三八を文武三年正月から二月の間、直後の二四一を同年七月以前の作と推定しているので、当該歌をその間の作と考えていると判断した。二四九—二五六については同書六四頁、二六一—二六二については七六頁を参照。
- 12 前出4同書、二〇九頁、参照。
- 13 坂本信幸『万葉集巻一巻頭歌群の照応』(『上代文学』第五〇号) 参照。
- 14 伊藤博、前出6同書下、第九章第一節「持統万葉から元明万葉へ」参照。(原稿受理一九九五年十二月八日)